

『かげろ心の日記解環』の依拠本文についての一考察

金, 英燦
九州大学大学院博士後期課程

<https://doi.org/10.15017/8953>

出版情報 : 文献探究. 44, pp.25-32, 2006-03-31. 文献探究の会
バージョン :
権利関係 :

『かげろふの日記解環』の依拠本文についての一考察

金 英 燦

一

現在『蜻蛉日記』の写本は最善本と言われる宮内庁書陵部蔵桂宮本をはじめ、すべてが近世に入ってから書写で、近世を遡る写本はないと言われている。作品の成立と現存写本の本文との間には、約七百年の空白期間が存在し、その間の転々書写に起因すると思われる誤字脱字など、本文の欠陥は枚挙にいとまがない。

『蜻蛉日記』の古注釈書について吉川理吉氏が、「この本に就きてしるき業績のはじめは、近世の釋契沖にあるべし。元祿九年四月彼所持の寫本に「水戸中納言光國卿御本」を以て一校しけり。又注解もしたり。その本今存否を知らねど」と述べているように、近世になって、はじめてこの日記の価値を認め、注解を試みたのが契沖である。

しかし、契沖の手に成る書入れ本は現存せず、わずかに門下今井似閑の書入れ板本（三手文庫蔵）によって、そのおもかげを知るにとどまっているのであるが、この契沖の書入れ本によって、『蜻蛉日記』の研究の基礎が築かれ、以後の学者たちはそれを参考にしつつ、板本に書入れを施すかたちで、『蜻蛉日記』の研究が継続されてきた。

本稿で取り上げる『かげろふの日記解環』の著者坂徴もその一人である。

坂徴は、その著『かげろふの日記解環』の「凡例」で、「余力所見ノ契沖本三本ノ内、尾州ヨリ求メシ本ハ谷川淡齋ノ本ヲウツセシナリ。ソレモ本ハ契沖ヨリ出テ少異アルモノニテ他ノ契沖二本ト互ニ得失ミユ。」と、契沖系統書入れ本を参考にしたよしを明記している。

このように、契沖書入れ本の以降、『かげろふの日記解環』が刊行される天明五年（一七八五）までは、板本書入れの形で本日記研究の命脈が保たれていたのである。以下、本稿では『かげろふの日記解環』の、日記本文に関する記述を検討することによって、その底本と言われている板本『蜻蛉日記』の本文との関係について、いささかの考察をしたものである。

二

独立した注釈書として最初に刊行された『かげろふの日記解環』は、五十嵐篤好の『かげろふの日記解環旅寝』（文政五年）、田中大秀の『かげろふの日記解環補遺』・『遊糸日記紀行解』など、以降の

『蜻蛉日記』研究にも多大な影響を与えた。

『かげろふの日記解環』は、著者である坂徴の没年（八十九歳）である天明五年正月、京都の林伊兵衛によつて刊行されたが、『かげろふの日記解環』の「序」には「あめあきらつひてふたつのさ月あやめふく日」と記されているので、天明二年にはすでに成立していたことが分かる。しかも、巻三の文中に「余イマダ六十八カリノ今ハ、昔或写本ヲ得テ幸ニ補ヒオキシ。近年契沖本ヲ見ルニ有之。尾州ヨリ得シ本ニハ無之。（13丁裏）」という記述も見出されるので、長期にわたつて注釈に努めていたことが窺える。

『かげろふの日記解環』の成果の一つとしては、『蜻蛉日記』の本文の乱れを「仮名の転訛」によるものと考え、たとえば、天曆八年夏の記事「あのけかりし」を「あはつけかりし」と改訂しているような、推測批判にもとづく本文校訂を施していることを、挙げることができる。しかし、昭和の初期ころまでの『かげろふの日記解環』に対する評価は、必ずしもその意義を十分に認めているとはいえない。

坂徴仲文甫が考証本に本づきて注釈を加へたるものにして、詳密なるものながら、編者が国文学における知識の甚だ浅識にして孟浪杜撰の説至るところに存するを見るべし。

（藤岡作太郎『国文学全史（平安朝篇）』^{（注2）}）

解環は大鏡、栄花其他諸書を引用して考証した所は大に参考となるが、其本文は勝手次第に改作した物と私は考へる。本文の

たよりには成らぬ本である。意味の通じよい所より、明治時代から此日記の復刻には解環が用ゐられて居るやうで有るが、之れはよくない行き方と考へる。解環の本文ははたして異本に然る本が有つたのか、勝手の意改か、其辺が不明で、実に怪しい本である。（正宗敦夫『蜻蛉日記』（日本古典全集解題）^{（注3）}）

『かげろふの日記解環』が著述された当時の伝本および注釈書の事情を考えてみれば、坂徴にとつて参照できる資料は限られていたに違いない。そのため十分な本文批判や本文改訂作業ができなかつたので、康保三年の兼家病臥のことを叔母のそれに誤るなどの失考もかなりあつたと思われる。しかし、近代の国文学によつて、このように評価された主因は、推測による本文改訂の乱用にあつたと言えよう。

しかし、このような評価は昭和の後半になつてから、いささか異なつてくる。特に、『蜻蛉日記全注釈』（昭41刊）の著者柿本奨氏は正宗敦夫氏の説を正面から批判し、「単にその筆者正宗氏ひとりにとどまらず、当時大方の見るところであつたと言つてよいであろう。

この日記の伝本や書入れ本の実態に対する認識が足りていたら、秋斎のとつた方法も理解できたはずで、さすれば「はたして異本に然る本が有つたのか、勝手の意改か、其辺が」明らかに見えたはずであり、「勝手次第に改作した物」というようなことばは出なかつたであろう。^{（注4）}と述べている。

右に挙げた柿本奨氏の再評価以降、現在に至るまでの大方の評価は、本文改訂の乱用は批判しながらも、先駆的な注釈書としての意

義を認めるに至っている。代表的な評価としては次のようなものがある。

板本を底本とし、意味の不通の個所を私意によって改竄し、新しい本文を整定している。そのため祖本より離脱した個所も多く語釈、考証に妥当を欠くものも見られるが、近世を遡る善き写本のない蜻蛉日記にあつて、しかも既に誤りの多い板本をテキストにしながら、これまでにない詳細な注釈、考証を行ない、それ以後の蜻蛉日記研究の指針となつた功績はきわめて大きく坂徴の名は蜻蛉日記研究史上ながく輝くものである。

(上村悦子、校注古典叢書『蜻蛉日記』注6解題)

さらにすぐれた注には、たとえば同じ和歌の勅撰集の詞書と比較して、『蜻蛉日記』の表現構造の特色を明らかにするなどの深い洞察も見られる。今日まで通用している確な本文や注解も少くない。しかし全体としての読みはけつして十分ではなく、行きすぎた推測による改竄本文や解釈上の失考もかなりある。(中略) こうした欠陥や未熟さはともかく、『解環』は、『蜻蛉日記』の最初の、しかし正当な方向を示した注釈書として、その研究史的意義はきわめて大きい。

(『日本古典文学大辞典』岩波書店)

三

資料に恵まれなかった坂徴ではあるが、『かげろふの日記解環』の執筆に際して参考にした本は幾つかある。先ず、『かげろふの日記解環』の依拠した日記本文について、柿本奨氏は、「普通ノ原本、上中下巻ニ又各巻ノ中上下、或ハ上中下巻ニワカチテ全部八冊アリ。」という『かげろふの日記解環』の「凡例」の記述をもとに、「明らかに板本のことであり、それを秋齋は底本にした」と、『かげろふの日記解環』のいう「原本」、すなわち依拠本文は、板本『蜻蛉日記』であると述べている。

しかし、『かげろふの日記解環』の底本が板本『蜻蛉日記』であるという指摘は、『蜻蛉日記全注釈』が最初ではない。底本だけではなく、ほかに坂徴が参照した本にも言及して、

著者契沖校本の轉寫本三本を得し由にて、それも参考せられたれど、なほ板本を本にして、随所随意改竄せるもの、そのこと書名にも標榜したりとは云へ無慙の感あり。

(吉川理吉「かげろふの日記の本に就いて」注7)

また本文については、版本を底本とし、著者所見の契沖本三本(そのうちの一本は谷川士清の本の写し)を斟酌して直し、それでもなお本来誤脱の甚しい本文には不審な個所が多く、それらにはやむをえず仮名の転化の跡を探つて推測本文を立てたという。

(『日本古典文学大辞典』岩波書店)

のような指摘もある。右に挙げた『かげろふの日記解環』の底本

および参照した本についての言及は、次にあげる『かげろふの日記解環』の「凡例」の記事に拠っている。この「凡例」によると、坂徴は八冊本の板本をもとに、また、契沖校本の転写本三本、そのうち一本は谷川淡齋の手が加わった本の写しであるが、この三本の契沖系統書入れ本を参照していることが分かる。その「凡例」の一部を掲げておく。

普通ノ原本、上中下巻ニ又各巻ノ中上下、或ハ上中下巻ニワカチテ全部八冊アリ。(中略) 余カ所見ノ契沖本三本ノ内、尾州ヨリ求メシ本ハ谷川淡齋ノ本ヲウツセシ也。ソレモ本ハ契沖ヨリ出テ少異アルモノニテ他ノ契沖二本ト互ニ得失ミユ。皆契沖家ノ直本ニ非ハ也。今ハカレコレノ内、理ノ宜ヤスラカナル説ノ方ヲトリテ斟酌モテ直シス。猶各其本文ノ下ニオイテコトワレリ。イツレモ契沖ニ屬セシナレハ、スヘテ皆契沖本ナリ。

(凡例、巻1・15丁裏)

扱此日記ノ本文ニ直チ二年号ヲ自ラアゲテ記セラレシハ、下巻ノ最初ニ、天禄三年ト書セラレシガ原本ノ全部八冊ノ内唯是已

(凡例、巻1・26丁裏)

このように、著者自ら『かげろふの日記解環』の日記本文および参照した本について記しているのであるが、『かげろふの日記解環』にいう原本と、板本『蜻蛉日記』との間には、一致しない箇所もある。その点について、いち早く注目したのは田中大秀であった。次にあげるのは、田中大秀が朱墨により頭注傍注の形で、『かげろふの

日記解環』に自説を書き加えたという、『かげろふの日記解環補遺』と名付けられた書き入れの一部である。

上段『かげろふの日記解環』の注 ― 下段『かげろふの日記解環補遺』の傍注。(該当箇所は『かげろふの日記解環』の丁数で示す。)

- ・ ナサヲ、原本なくはトハアヤマル ― ならはトアリ (「なくは」の傍) 【巻5・2丁表】
- ・ カヘシノ歌ノアフコヲ、原本ニ、あしトアリ ― あこトアリ (「あし」の傍) 【巻6・12丁表】
- ・ 原本ニあめいたうはらめにてあられにトアリ ― いとアリ (「あめ」の下) 【巻9・9丁表】
- ・ ヤムヨナカリキヲ原本ニハ、やむまなかりきトアリ ― よ (「ま」文字の傍) 【巻9・12丁裏】
- ・ 原本ニナミダノかぬきもトアリ ― 今本くとトアリ (「も」文字の傍) 【巻9・17丁表】
- ・ 原本ニハ、ヤムゴトナキニモトノ下はわけはたゝ月も見なくにトアリ ― 本ハ (「わ」文字の傍) 【巻9・22丁表】
- ・ 原本きかけたりやすらふトアリ ― に (「きかけ」の下) 【巻11・12丁裏】
- ・ 原本ニ御フネドモトアリ今沖本ニシタガフ ― 原本なかむるかふねともゝのほり (頭注) 【巻12・3丁裏】
- ・ 原本結語人ハヨルトモト沖本ニヨリテウツセリ ― 本人はよるとてトアリよハかノ書サマアシキ也 【巻15・15丁表】
(注8)

しかし、『かげろふの日記解環』における「原本」とのくいちがい
は、以上に尽きるのであろうか。私見によれば、上記『かげろふの
日記解環補遺』の指摘箇所以外にも同様の例は見出される。本稿で
は、『かげろふの日記解環補遺』の指摘をふまえた上で、さらに『か
げろふの日記解環』における日本文と、板本『蜻蛉日記』本文と
の比較を試みた。

その中、底本についての記述として、一番多く見られたのは、「品
高キ女ヲ、原本ニ也ニ作りシ。疑モナキ誤故、今スデニ直シガ、契
本トアヘリ（巻2・2丁裏）」のように、「原本」という形で本文が
引用されている例である。しかし、場合によつて、「原文、アゼチノ
大納言ノカタヘニもろうぢの御事にやト、傍注ヲ加ヘタリ（6巻26
丁表）」のように「原文」、或いは「キ、ハサメテヲ、契本ノ一二、
ハサミテト直セリ。サレド原ノゴトクハサメテノ方キ、ヨキニ似タ
リ（巻5・26丁裏）」と、「ヨガナクニハイ本ガキニテ、本ハヨリナ
クニトアル（巻18・21丁表）」のように、「原」あるいは「本」と略
して指す場合もある。

『かげろふの日記解環』には、このような四六八例の「原本」に
ついでと言及があった。そして、これらの「原本」と板本『蜻蛉日
記』の本文とを比較してみたところ、『かげろふの日記解環補遺』で
指摘されている箇所以外にも一致しない箇所があったので、以下に
板本『蜻蛉日記』の該当本文箇所とともに、その全用例をあげる。^(注9)

上段『かげろふの日記解環』の注 — 下段板本『蜻蛉日記』

- 1 モロトモノトモ原本例ノゴトクとんトアリ【巻5・24丁表】
— もろとて【上巻39表】
- 2 ユスルツキノツノカナヲ原本脱セリ【巻6・3丁表】
ゆるつき【上巻42表】
- 3 神ガキヲ原本神クミト其誤分明【巻6・4丁裏】 — 神
かみ【上巻43表】
- 4 原本ニ水のこゑもれいにすぎもと有さしてたちいたり【巻
6・21丁裏】 — みつのこゑもれいにすぎもと有さして
たちわたり【上巻51裏】
- 5 原本こしの句まいりうかトアリ【巻7・3丁裏】 — さ
いりうか【中巻2表】
- 6 をはたかへりト原本ハ誤レリ【巻7・10丁表】 — をし
たかへり【中巻5裏】
- 7 舞ノ師原本ニまひのしおほくと有【巻7・25丁表】 —
まひのしおほへ【中巻18裏】
- 8 冲本尾本共ニ原本ノなねせみトアルねノ字ヲはニ直シテ和
名抄ヲヒケリ【巻14・24丁表】 — なはせみ【下巻29表】
- 9 其下ノツギキノ詞原本又誤リテ御ことのみなかまりてトア
リ【巻17・19丁表】 — 御ことのみなかきりて【下巻64
表】
- 10 原本ニウリワリカラシテト有【巻18・22丁裏】 — こり
わりかをして【下巻84表】

右の十例は、3番の「か」と「く」、4番の「わ」と「い」、5番の「さ」と「ま」、7番の「へ」と「く」、9番の「き」と「ま」、10番の「う」と「こ」など、字形の類似に発する本文の読み違いではないかと思われる。従って、これらの用例は厳密な意味での本文異同とは言えない箇所である。次に脱字・脱落ではないかと思われる用例も少々見られたので、それをあげる。

- 11 ハカナモ原本ニはなト誤也【巻5・15丁表】 — はかな【上巻35表】
- 12 原本ニつらしとおもへとト有【巻9・5丁裏】 — つらしとおもへと【中巻35表】
- 13 原本ニハわか家とさとにとまれるトアリ【巻9・27丁表】
— 我いとさとにとまれる【中巻42裏】
- 14 原本ニうかひヲウタカヒトシひとかゝリヲ人かりトウツシ
アヤマレリ【巻12・10丁裏】 — うかひ【中巻72表】
- 15 アワタ、シヲ原本ニアリタ、シト誤【巻16・17丁表】 —
ありたし【下巻50表】

これらの用例中、坂徴の意図的な省略、たとえば、13番の「とまれる」のように、衍字と判断しての省略の可能性も考えられる。しかし、11番・14番の用例の場合、原本の「はかな」「うかひ」になっている箇所を、「はな」「うたかひ」となっていると注を付け、原本と同じく「はかな」「うかひ」と直しているのは、疑問の余地がある。

最後に、これらの読み違いおよび脱落と思われる箇所以外に、板本『蜻蛉日記』の本文とは違う本文を参照しているのではないかと疑われるような例もあった。

- 16 ヒトリネノ数ニシヲ原本人りねのよわしト大ニ誤【巻4・7丁表】 — 人りねのよすにし（元暦版・宝暦版A）・ひとりねのかすにし（宝暦版B・文政版）【上巻21表】
- 17 モノシタルヲ原本みのしなかたちトアリ【巻5・5丁裏】
— みのしてたち【上巻30裏】
- 18 原本ニ驚そおもはへてトアリ【巻7・28丁裏】 — くるすそおもはへて【中巻14裏】
- 19 原文いさうくなたの身になくらいたもくちひきすこすと云【巻8・25丁表】 — いさうくなたの身にはいでもくちひきすこすと【中巻30裏】
- 20 原本ニハ大ま衛トアリ【巻9・4丁表】 — 大共うへ【中巻33裏】
- 21 我心ヲ契ノ二本トモニ我タメニト直セシ然レトモ下ヘノクサリ意通シカタキニヨリ今ハ姑原ノゴトクシテヨミ下セリ【巻9・9丁表】 — 我め【中巻34裏】
- 22 次ノ句一本ニ京ノコレカレノモトヨリトモアレド今原本ニヨレリ（解環の本文—京にのこれるもとより）【巻11・16丁裏】 — 京のこれのもとより【中巻62表】

四

『かげろふの日記解環』の「凡例」には、「此日記原本ニもノカンナヲント書事シバくミユ。原本ノミナラズ、写本ニモカクノゴトクナレバ、此時節ノ通用セシモノナラン。(巻1・22丁裏)」という記述が見られる。この記述は、坂徹が原本すなわち板本と写本とを区別して使っていたことの証拠になると思われるが、板本を底本にしたとすれば、それは元禄十年版であろう。

宝暦六年版『蜻蛉日記』の板本には宝暦版A(元禄十年版と一致)と宝暦版B(文政元年版と一致)の二種類があるのは周知の事である。^(注10)

『かげろふの日記解環』の成立は天明二年であつて、宝暦版Bを見た可能性もあり得るが、前節で確認した板本『蜻蛉日記』との異同個所以外の本文は、全て元禄版・宝暦版Aと一致していることから、宝暦版Bを見た可能性は無いと言える。

たとえば、上巻、天徳元年十月の記事中、元禄十年版の「十月ばかり、こそはしも、や心ごと」となっている箇所が、宝暦版Bには「十月ばかりに、それはしも、やんごと」と改められている。この箇所を『かげろふの日記解環』は、「十月ばかり、こよひしも、やんごと」と改訂し、「コヨヒヲ原本ニこそはトアルハ、例ノ轉轍ノ誤ナリ。又、原本ニヤンコトナキノんヲ心ニアヤマリ(巻3・29丁裏)」という注を付けているので、それは確実に元禄版・宝暦版Aであることが分かる。

にもかかわらず、『かげろふの日記解環』にいう「原本」の本文と、板本『蜻蛉日記』本文との間には、少なからぬ異同が見られたのも

事実である。これらの異同は、板本『かげろふの日記解環』だけの間違いである可能性も考えられる。本稿は『かげろふの日記解環』の原本と、板本『蜻蛉日記』との間に異同箇所があることを指摘するに止めたが、今回解明できなかった異同の原因についての考察は、今後の課題にしたい。

注

注1 吉川理吉「かげろふの日記の本に就いて」『国語国文』(第六卷第十号)京都帝国大学国文学会、昭和十一年十月

注2 藤岡作太郎『国文学全史(平安朝篇)』東京開成館、明治三十八年九月

注3 正宗敦夫『蜻蛉日記』(日本古典全集所収)の解題、日本古典全集刊行会、昭和三年一月

注4 柿本奨『蜻蛉日記全注釈』角川書店、昭和四十一年十一月

注5 上村悦子『蜻蛉日記』(校注古典叢書)、明治書院、昭和四十三年四月

注6 注4に同じ

注7 注1に同じ

注8 『かげろふの日記解環補遺』の引用は、『未刊国文古註釈大系』(第十三冊)、帝国教育会出版部、昭和十三年一月)による。

注9 『かげろふの日記解環』と板本『蜻蛉日記』(文政版)の資料は、九州大学附属図書館のホームページ(<http://herakles.lh.kyushu-u.ac.jp/kagerou/>)に公開されている画像を、元禄版『蜻蛉日記』は国会図書館所蔵本をもとに、喜

多義勇氏『全講蜻蛉日記』（至文堂、昭和三十六年十二月）の校異表を大いに参照した。

注10 上村悦子『蜻蛉日記の研究』明治書院、昭和四十七年三月

（付記）本稿は平成十七年度九州大学国語国文学会（平成十七年六月五日）における口頭発表に基づく。席上、種々の御教示を賜った方々に心よりお礼を申し上げます。

（きむ よんちゃん・九州大学大学院博士後期課程）